

---

# とある魔術の詠唱呪文

SE7EN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある魔術の詠唱呪文

### 【Nコード】

N8726W

### 【作者名】

SE7EN

### 【あらすじ】

気がつくとそのこは学園都市だった。人口二三〇万人の最先端科学都市。超能力が科学によって証明された街で、少年は詠唱呪文の力を得た魔術師として転生したのだ。

## M a g i c 0 (前書き)

作者の妄想と理想を融合させたような小説です。  
合わない方には戻るのボタンを押して下さい。

さてさて、自分に何が起こったのか理解する時間が必要みたいだ。道の真ん中に立ったままでは通行人の邪魔になる恐れがある、と言つかじつと突っ立っていたら変な人に見られるかも知らない。

と言う訳で、彼、かみお きりこ上尾桐戸は取りあえずベンチに腰を下ろしてみた。

少しずつ分かっている事を整理しようと、ブツブツと声に出していく。

まず、ここは学園都市。

でもって、俺は転生した。

なぜか、こちらの知識が頭の中にある。

何でも、柵川中学の二年らしい。

ただし、能力者ではないらしい。

なぜなら、

「メラ」

詠唱と共に手のひらに火の玉が形成される。

ジュッとその火の玉を握りつぶす。

「……マジかよ」

能力者ではなく、魔術師。

それも、この世界の法則ではない、異世界の法則。

詠唱だけで、魔法を扱う魔術師。

「おいおい、そんな設定大丈夫かよ」

詠唱呪文。

この世界で必要とされている下準備が全く不要の、反則の様な魔術だ。

もちろん、メリットだけではなく、声に出さなければならぬと言つてメリットもあるが、それでも唱えられる呪文の数を考えてみれば、メリットの部分が大きすぎる。

ただ、この力を持って自分は何をすればいいのだろうか？

元々、この世界の住人ではない彼がこの世界に介入することで、世界のバランスが崩れたりする可能性も無きにしも非ずだ。

だが、

轟！ と目と鼻の先の銀行のシャッターが大きな爆発と共に崩れ落ちた。

「おい、速くずらかるぞ！」

目の前で銀行強盗発生。

さらに周囲を見渡してみれば、

（なんか小さい子が多いぞ！？）

よく見れば、シャトルバスが止まっている。

大方、施設見学か何かだろうか？

そんな近くで強盗が発生してしまった。

（ああーこんな介入するしかないじゃん！）

上尾桐戸は走り出す。

被害は少ない方がいいに決まっている。

が、走り出した足は直ぐに止まってしまふ。

「ジャケット風紀委員ですの。無駄な抵抗はお止めになることをオススメしますわ」

（風紀委員。確か学園都市の治安を守る機関だったっけ？）

しかし、相手は三人。さすがに女の子一人では荷が重いだろう。

（どっちみち、介入するしかなさそうだ）

だが、以外過ぎるほどに事件は淡々と解決に進んで行くのだ。

三人が弱い、と言うより風紀委員の女の子が強い。

時折見せるのはレポート空間移動。

さすがは学園都市の治安を守る、と言うだけの事はあって、強い。強盗の中にも能力者はいたようだったが、あつという間に一人は地面に伸びて、一人は地面に押さえつけられてしまった。

（自分を移動出来れば大能力者になれるんだつたよな、レベル4空間移動能力者って）

と、

「なんだテメエ離せよ！」

犯人の最後の一人だろうか、バッグを担いだ男が小さな子供を車に連れ込もうとしている。

そして、それを必死で抑えようとする一人の少女。

「ダメ！ 絶対に離さないから！」

「クソが！」

ドンッと男がその少女を蹴り飛ばした。

悲鳴と共に、その女の子は地面に倒れる。

子供は無事だ。

だが、その少女は顔を蹴られた。

「許せねえな。その歪みっぷり」

そして、上尾桐戸は立ちほだかった。

道路の中央へで上尾桐戸は少女の前に立ち、逃走しようとしている車を見据える。

車は強盗に失敗した腹いせか、仲間をやられた腹いせか分からないが、そのまま逃走できたにも拘らず、車を横滑りさせ方向を転換させると、こちらを向いてエンジンを吹かせ始めた。

「そのの貴方！ どなたかは知りませんが一般人がこの様な事件に首を突っ込まれては」

「関係ない。これは個人的なことなんでね」

「はい？」

「女の子蹴られて黙っていられるほど、お人好しじゃ無いってことだ」

そして、風紀委員の少女は見た。

少年の両手から生み出された炎が頭の上を弧を描いて渦を巻いて繋がっている。

炎の橋。

さらにそれを圧縮するように頭上で合せ、

「威力は落としてやる、だから痛みで多少反省するんだな」

両手を前に向けて放つ。

「ヘキラゴン 極大閃熱呪文！」

巨大な閃光が両手から放たれた。

高エネルギーの熱線。

生身の人間に放つには、あまりにも巨大すぎる力。

だが、

轟！ という音と共に地面が爆発した。

上尾桐戸から放たれた閃光が男の運転する車に当たる直前で地面に激突したのだ。

巻き起こる熱波と爆音。まるで巨大な爆弾でも爆発したのではないかと思うほどの衝撃。

その爆風によって車は宙を弧を描いて吹き飛び、地面に激突。

甲高いクラクション音を鳴り響かせ、ボンネットから突っ込んだ

その車は、大破せずどうやら中の男も無事な様だった。

「す、すごい」

後ろで少年を助けた少女は、ぼそつと呟いた。

「何者ですの、あの男……？」

そう言われてようやく気がついた。

（あ……、目立ちすぎだよバカ！）

あああ、と頭を抑える上尾桐戸だったが、時すでに遅かった。

「あ、ありがとうございます！ その、助けてもらって」

少年を助けた少女はペコペコと頭を下げてくる。

「発火能力者ですか！？ パイロキネシスト ああ、あの威力、大能力者レベル4いや、超能力者レベル5級で

したよね！？」

不味いことになってしまった。

無駄に介入しないつもりが、ものすごく注目を集める羽目になってしまった。

実際能力者ではない訳であって、さてさて、どうするか悩みどころである。

「ええっと……通りすがりの能力者ってことで」

それじゃあ！ と手を上げて

「レムオル！」

相手が発火能力者と思っっているので、それに似たモノを選択した。姿を消す力だが、相手から見れば、炎によって生み出した塵気楼に見えたであろう。

「え？ あれ??」

と、キヨロキヨロと上尾桐戸を探している様だが、それを他所に見えなくなった上尾桐戸は走ることもなくその場を去っていく。

(まずい……顔覚えられたかも)

ただ、この学園都市には人口二三〇万も人がいて、その八割が学生だ。

そんな大人数の中、そう簡単に同じ人間には出会わないだろう。

と、そうなることを祈りつつ、上尾桐戸の学園都市での初日が終わっていく。

だからこそ、次の日にその少女と出会う事になるなど思いもしなかったであろう。

え？ 運命の出会いなんかじゃないよね？

## 主人公（前書き）

簡単な主人公紹介です。

## 主人公

・名前

上尾桐戸 かみおきりと

柵川中学に在籍しているが、実際は転生者。学年は二年。

身長は一六五センチ、体重五三キロ。

黒髪短髪で、金髪であったり、ピアスを付けていたり、白髪だったり、などという様なモノはなく、特にこれといって特徴はない。

あまり目立ちたくない、と言う考えを持つ一方、正義感は強く、実際に強盗現場を目撃した時も目立つと分かっている、その場に飛び出し能力を使用した。

・能力

詠唱呪文

この世界とは異なる方式であるため、下準備を全くと言ってよいほど行わずとも詠唱だけで発動する事ができる魔術だが、詠唱できなければ発動することは出来ないと言うデメリットもある。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8726w/>

---

とある魔術の詠唱呪文

2011年9月27日03時11分発行